

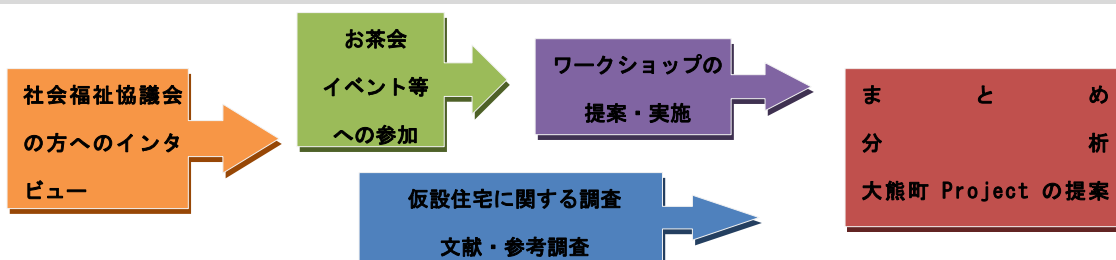
会津若松市に建設された 応急仮設住宅におけるコミュニティの研究 ～大熊町住民を対象として～

インテリア 柴崎ゼミ
A2201019 宍戸 舞

研究の目的・背景

今回の震災では、福島第一原発の影響により多くの方の故郷への帰宅が困難になった。帰宅する具体的な目途もたっておらず、そんな中で生活していくしかない被災者の方たちの精神状態はとても不安定なもので阪神淡路大震災時のようにますますの孤独死や自殺が心配されている。そこで重要視されてくるのが、被災者の方の「心のケア」である。周囲とのコミュニティを図ることによって、被災者の孤立感を軽減していく必要がある。

研究の進め方



調査

◇ 応急仮設住宅コミュニティの現状・被災者へのヒアリング調査

現在会津若松市に建設された応急仮設住宅で生活している被災者へのヒアリング調査を行った。コミュニティの現状としては仮設住宅ごとに自治会が成立しているところと、していないところでは、サロンの回数なども異なっており、差が開いてしまっていることがわかった。また、活発な自治会では、とても頻繁にサロンを開催しており、みんなで集まれることが今の唯一の楽しみだという意見も聞かれた。

◇ 大熊町役場社会福祉協議会職員ヒアリング調査

大熊町社会福祉協議会職員主任主査の武内智恵美さん、生活支援相談員の根本光江さんに仮設住宅でのボランティア活動についてや、これまで行われてきたイベントやサロンについてのヒアリング調査を行った。ボランティアを行う上で最も大切な事としては、何かをやってあげるという態度ではなく、この人達と一緒にこれをやりたいという同じ目線に立った態度であるということだった。

◇ 第二中学校西応急仮設住宅での第一回サロン(平成 23 年 12 月 23 日)

昨年の 12 月 23 日にクリスマス会の企画の一つとしてクリスマスカード作りを行った。子供から大人まで 10 名以上の方に参加していただいた。それぞれ、思い思いにカードをデザインしていて、お互いのカードを見合いながら、感想を言い合うなど、コミュニケーションが図れていたように感じた。また、何か、自分の物を作るということに対してとても一生懸命な方達であったと感じた。



クリスマスカード作りの様子

◇ 第二中学校西応急仮設住宅での第二回サロン(平成 24 年 1 月 14 日)

同じく、第二中学校西にある応急仮設住宅で写真立て作りを行った。大人 9 名子供 3 名の方に参加していただいた。参加者の声としては、何か物づくりをやってみたかったから楽しみにしていた、といった声や、ここ最近入院生活をしていて、退院してみんなで集まる機会を楽しみに待っていたという声があげられた。また、この日を境にここの仮設住宅では定期的に行うサロンの日程が決められた。



写真立て作りの様子

分析

実際にお茶会やサロンに参加し、また、自分でもサロンを開催してみたりして感じたことは大熊町の方はかなり積極的であるということだ。震災が起きたことによって人と繋がろうという積極的な想いが感じられるからこそ、サロンや集まりには参加し、そこでの情報交換、コミュニケーションを大切にしていた。しかし、自治会がまだ不安定な仮設住宅では集まりたくてもきっかけが作れないといった住民の方の想いが感じられた。サロンやお茶会など、定期的開催するものがあるからこそ、自分の隣近所の予定(例えば病院に通う曜日など)がわかるのである。そういった自分の状況を分かってくれる誰かがいるという事が孤立といったことをなくしていくのだろうと考えられる。

提案

◇ 大熊町 Project 「私たちはここで元気にしています」

このプロジェクトは自分たちの住んでいる所をもっと明るくし、という目的で行うものである。これが「自分達だ」と思えるような写真を仮設の壁に展示し、仮設住宅自体を明るくし、近所の方とのコミュニティができるような住宅にするための提案である。今回私が第二中学校西応急仮設住宅で開かせていただいたサロン時の集合写真を、仮設住宅の集会所に掲載する。ここの仮設住宅では、今まで定期的に行われたサロンがなく、イベント等の参加者も限られていた。集会所に大きく掲載することで、今までサロンに参加していなかった方にもサロンの様子が伝わるようにすることで、仮設住宅で暮らしている方のコミュニティを図るツールとする。



仮設住宅集会所に貼るポスター写真

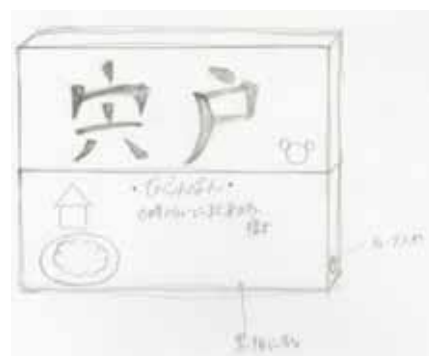
◇ コミュニケーションボード

仮設住宅にはチャイムが設置されておらず、来客があっても中まで声が聞こえない、また、来客の方も外出中だと勘違いして帰ってしまう、そんな状況が仮設住宅では起っている。そこで、チャイムの代わりとなることができ、伝言を残すことができるコミュニケーションボードの提案をする。伝言を残す意図としては、仮設住宅に入居されている方の多くは高齢者であり、普段から携帯電話を持ち歩いてメール機能を活用するということがほとんどないということが、サロン活動を通し感じたからである。

〈コミュニケーションボードの構成について〉

120mm×300mmの板を2枚使って構成する。

1枚目は、表札として自分の名前を彫ってもらい、彫ったところにペンキで色をつけるようにする。2枚目は、黒板スプレーを使い黒板形式にし、伝言板として活用できるようにする。また、「外出中」や「在室」といったマーク等を仮設住宅ごと、または個人で決め、黒板にペンキでペイントし、ペイントされたマークをチョークで囲むことで外出中か、在室中かが分かるようにする。



コミュニケーションボード スケッチ案

考察・まとめ

今回、東日本大震災が起こったことにより、この研究のテーマに取り組もうと考えたが、コミュニティというソフトなテーマに関しては、まず人の繋がりを自らが作っていくという部分でとても難しいものを感じた。震災に関わるテーマという点で、とてもデリケートであり、どういったところから被災者の方との繋がりを作っていけばいいのかとても悩んだ。しかし、最終的に社会福祉協議会の方を通して仮設住宅に足を運ばせていただき、自分自身でサロンを企画し、開催できたこと、自分自身の人の繋がりを作れたことに対して、とても感謝すると同時に意味のあることになったと感じた。また、近所の方とコミュニケーションを取ることにとても喜びを感じている住民の方を見て、こんな風に震災になってしまった時ほど、コミュニティは本当に必要なものなのだと感じる事ができた。

